

生活の伝承 3

発行者 民家園のつどい
会長 斎藤久一
発行所 福島市五老内3番1号
福島市教育委員会
社会教育課内
民家園のつどい



親の手から 子の手に

副会長 片平春夫

朝起きると、タイムスイッチと連動した電気釜の御飯が炊き上がり、夕べ準備しておいた鍋をガスコンロに掛ける。間もなく化学調味料と味噌を入れると味噌汁も出来上がる。卵やパックしてあるノリ、納豆等を食卓に乗せると朝食となる。

今朝はパン食とする。フライパンでハムエッグを作り冷蔵庫からパセリやレタスを出して皿に盛る。トースターでパンを焼きバターを塗り、牛乳パックやインスタントコーヒーをつけて立派な朝食となる。

学校に行く子供のいる家庭でも給食があるので弁当を作る必要はない。勤めに行くお父さんも高校生の兄も弁当を買ったり食堂での外食となることが多い。

こんな朝食準備のパターンが一般的な家庭の姿でなかろうか。二三十年前家庭では予想もつかないことで、比較するのが可笑しいほどの進歩である。短時間で美味しい食事が作れ手間もかからぬ。生活も向上したし、朝寝坊も出来るし、こんなに素晴らしいことはない。

しかしその一方で失なれたものも多い。生活の中で必要なないものが無くなるのに当然であって、社会の進歩のためにはしかたのないことである。ある人が年中行事だけは残るだろうと云つたが、それについてもその内容は簡素化され質的にも変化している。

冒頭にあげた朝食の例でもカマド、コンロ、釜等がなくなりそれに伴なう技術もなくなった。

先日あるところで、最近食文化が失なわれた。子供はもちろん母親でさえも箸の持ち方を忘れつづる。これは学校で教えないからだと云う人がいた。

箸を使い始めるのは幼児期である。また一年間の食事回数のうち学校給食は僅かに六分の一にすぎない。誰が食事のマナーを教えなければならないのか自明の理であろう。生活技術とはごく普通の生活中で親から子に見よう見まねで育まれ、自然に伝えられるものである。

近代化の中で失なつてはならぬ最小限の生活技術まで残らないとするなら問題である。親の自覚と責任を誰でもが考えるよう社会全体が努力せねばならないし、生活伝承の会の活動の原点もここにあらう。

昭和62年3月30日

生 活 の 伝 承

民俗の伝承

秋山政一の「けいこ」

昨年のこと、三春町の民俗調査で、過足（よぎあ）のおばあさんから、教えてもらった「あやとり」は、機織りの「糸のべ」ときの「綾」をつくる技術であった。ところがこのおばあさんの「あやとり」の手さばきは、子供の頃、女の子が遊んだ「あやとり」の手さばきにそつくりであって、機織りの技術の中にこの「あやとり」の遊びが生きているのは、非常な驚きであった。

子供の頃からの遊びの中で、大人になってから役に立つ技術が、それも知らず知らずのうちに——楽しみながら遊んでいるうちにけいこが出来ていたとすれば、それは素晴らしいことではなかつたのか。

× ×

物の乏しい、人も少ない——これは農業という労働力を必要とする産業に重点をおいていたためであつたから、大人になつてからもまたこれに同調し、中には、「私は大学を出ないで苦労したから、せめて大学はいい大学を」をなどと、お涙を頂戴できそうに考えているのである。

この間の夜、顔みしりの若い御夫婦が私の家を訪問された。相談があるというお電話であったので心待ちしていたら、お出になつた。

きけば一人っ子の、そもそも男の子で、高校を受験して失敗したので、何とか救済の方法はないかという相談に来られたのであつた。

お話をおききしているうちに、私学でもいいから先生を紹介してもらつて、何とかしたいという下心がよみとれた。

そんなことは、教育という仕事でないと

叱りたい気分をおさえ、長いこと、いまの教育についての困った実情を感想として話してあげてみた。

私は今までの教育経験の中で、しかも教育を受けた時代——少年時代から教育をする教師としての大人になつてからの時代と、いまの時代とに大きなちがいがあることを自覚している。

これから仕事をじっくりと「けいこ」をして進むように仕向いているのである。

それなのに、学校も親も、自分のかつて経験してきた時と少しも変らず、きつちりと目的を定めて、すぐに役立つような、学習を「けいこ」して、むかしから有名コースと知られる学校の教育をうけて、それが一人前になる道だときめているのである。

そのため、学校は幼稚園から小・中・高の学校もすべてこのための道すじを進めることを考え、親もまたこれに同調し、中には、「私は大学を出ないで苦労したから、せめて大学はいい大学を」をなどと、お涙を頂戴できそうに考えているのである。

× ×

こうして、学校と親は協力して、ある一つの、ただ一つの「けいこ」学習を——予備校まで動員して——やって、生徒を激励しているのである。

中には、生徒の個性を尊重するための特殊な方法などと考えて学校が教師と共に考えた「能力」をしらべては、激励を続けているのである。

三春の老婆は、五つ六つから遊びながら「あやとり」のけいこをしてその技術を身につけていった。長い時間であった。あの頃は時の変化がおそかつたから、それはそれは長い道のりであつたろう。しかし、今日は、生活の上の時間は短かいので、人のやりなおしができる時代である。一年ぐらいいの取返しは、そんなに困難ではないのである。

そんなどに気をもまことに、自分の特性をみつけるために時間をかけてけいこをしてみると、見てやるべきではないだろうか。もう一度、自分の歩いてきた姿を振り返つて、それこそ、新しい世代に生きて行く者たちに、もう一つのけいこがあるということを、しっかりと植えつけてやりたいものであると思つた次第である。

そのため、学校がたくさんでき、自分の

民俗の伝承 (6)

生家のことー建物をめぐる思い出ー

太田 隆夫

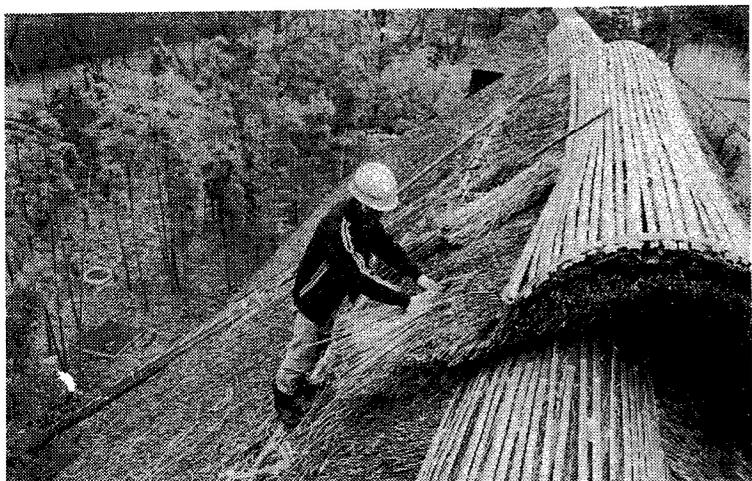
すでに十年ほど前に取りこわされ、現代風な住宅に建てかえられてしましましたが、私の生家は、それまで軒先の低い萱葺き屋根のつまり「民家園的建造物」でした。

四歳から五歳のころのかすかな記憶の中に、母屋の屋根の葺き替えときと思われる映像がちらちら見えたりします。農家の萱葺きの全面葺き替えは、約五十年の周期なんて何かで聞いたことがあります。だから記憶にある多勢の人が立ち働いていたときから逆算すると、生家は明治二十年から三十年代にかけて葺き替えられたものと推測もできます。

以来母屋を取りこわすまで約四十年ちかく萱葺き屋根は、戦争の時代をはさむ風雨にさらされてきました。雀や椋鳥が巣をかけ、その雛をつかまえたくて、子どもたちの梯子を使って登つたこともあります。

生家は「通りの間」と呼ぶ廊下より少し広い通路をへだて北側に「中門」といっていだ二階建ての部屋がありました。いま考えますと県北地方に多い「中門造り」の民家だったのです。生家は蚕も飼育しましたから、この盛時には摘んできた桑の葉の貯蔵部屋に、この中門の一階部分は使われていました。

ご祝儀とか法事、その他の人寄せ振舞いのとき、この部屋はお膳とお椀をそろえ、ご馳走の準備のためと近所の手伝いの人や叔父・叔母たちの控室となりました。通りの間は、中門の左手奥にある土蔵へつづいていました。父や母が入口の戸を開けて中に入るとき、木製の厚い戸の車が、板敷きの通路にひびいて重々しく伝わりました。夜などは子ども心に不気味にきこえて、冥界から亡くなつた祖先が戻つてくる



白壁仕立てなのに、前の蔵は粗壁のまま、それも軒低くずっと時代的に古めかしい建物でした。

一般的にはお正月の門松は、母屋の入口や門にたてられましたが、私の生家ではこの「前のくら」の前にたてました。母屋入口には輪かざりを飾るだけでしたので、年始の来客は門松をくぐらないで訪れるようになりました。

門松は、まず葉のついた細い手ごろな青竹を三本伐つてきて二本を立て、一本は人が通れる高さに横にわたし、立てた竹に松を添え、そのままわりに割った松や雜木の薪で円形にかこみ縄で結わえました。横にわたした竹には注連縄を張り、中央に串柿を和紙に包み、紅白の水引きで束ねたのを結びつけてありました。また左右の竹には、秋に採つておいた枝つきの柿もさげました。この枝つきの柿は座敷の神棚にも供える風習としていました。

生家にはこのほか木小屋二棟、板廻いの穀倉、二頭の馬を飼える個室がある二階建ての馬小屋、鶏小屋、風呂と便所の棟、昭和初期まで家内制手工業的に五、六基の釜をおいて操業した糸とり場、コウジを作る室(むろ)などの建物がありました。

正月の輪飾り、だんごさしのみず木、節分の「ほおどおし」は、これらの建物へそれぞれに供えましたから、父や長兄がつくった数もたいへんでした。母屋はすっかり新しくなつたものの、これらの建物はかなり機能を変えてもいまでも残つており、時折訪れると、少年時の思い出が物かげにゆれたりしてみえます。

この土蔵は裏手にあるので、私たち家族は「背戸のくら」と呼び、母屋の右手前にあるもう一棟の「前のくら」と区別して、代々呼びならわしてきました。背戸の蔵は

昭和62年3月30日
生活の伝承
第3号 (4)

ザアト昔(民話)

— 叱内の大カヤに住む古狸 —

加藤 春雄

私が子供の頃家の親せきに行くと、お爺いちゃんよりこんなザアト昔(民話)を聞いたものだ。
お爺いちゃんの名は「阿部繁松」今はす遠い昔日の想い出である。私が六、七才頃であったろうか?

この大カヤは昔うつそうとして繁り、周囲もまた雑草も生えしげり、夕方になるとなんとも淋しい場所だった。夕方になると女子供は通れない場所だった。

太陽も西の山に沈み暗くなると、此の木の上にポッカリと灯がとどり、木の上で糸くり車をまわすおばあちゃんの姿が見られる。糸くり車を廻す音がグングンと聞え、何か咽声も聞えて来る。村人が近よってきて見ると、「小豆研ぎましようか!人取つて食いましょうか!ザックザック」と聞こえて来る。これは唯事でないと言う事になり村人は集まり相談し退治する事にした。それで鉄砲うちを集めて鉄砲でしとめる。と言う談取りになり、愈よ愈よ実行の日が来た。陽はとっぷりと暮れて暗くなり鉄砲うちはそれぞれの部所についあって居ると、やがて木の上にボンヤリと丁灯に火がともり例のばあさんが糸くり車をグングンと音をたてて廻し始めた。

また例の唄声が聞えて来る。

小豆研ぎましようかと!人取つて食いましょうか!

鉄砲うち達はそれ……と言ふ合図のもと一斉にはあさん(化物)めがけてドンドンと引金を引いた。

命中したかと思ひけりや、化物はケタケタと笑つてにらみかえして来た。そのぎょう相はすごいのなんのお不動様か仁王様か鬼婆(オニ婆)かさすがの鉄砲うち達も

ぞつとする様な格好であったそうだ。

そして其の晩は解散し、村人達はもう一度相談をする事にした。たしかにあたつた

と思ったのがなあ……然し化物は生きて居る。と言う事は何んとも不思議でならないかった。誰かが言つた。今度は、あのあかり丁灯めがけて皆んなでうつて見つペーと言ふ事になりました。

そして夜の来るのをまつて、するとポンヤリとあかりがともりやがて化物はいつも様に唄い出した。

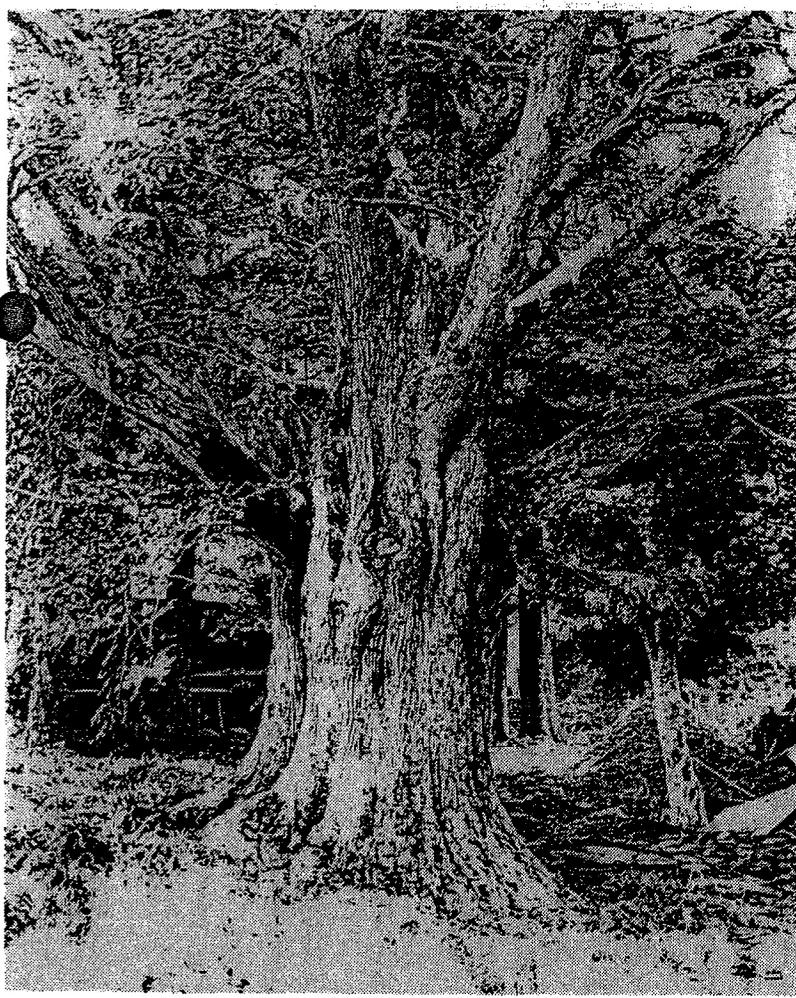
鉄砲うち達はよく的をねらつて一二三で

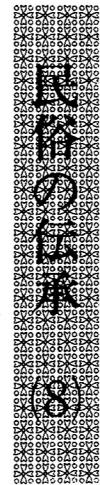
発射した。村人達はかたずを飲んで様子をうかがつて居たらギヤと言う物すごい音がした。それで村人達は夜が明けたら行く事にした。やがて夜がしらしらとあけ村人は集まつて來た。

村人達はおそるおそる皆んなで行くところがない群衆心理であろう。近よつて見るといい古い大狸が死んで居たそな。それからは、化物は出なくなり村人達はヤレヤレと一安心、平常な生活に戻つたそな!

市・天然記念物 叱内の大カヤ

かますうち





一九二四年 才レ九才

夏休みの友に書かなかつたこと――

六月

河原のバラの花が咲がねうちは、水あびしてなんね』とやかましくいわっちえいするもんで、日だまりに一つ二つ咲いたのを見つけと、荒川飛びこむ

吾妻山の雪しろ水はひやっこかつた。おれ我慢して泳いだら、あした熱出して学校休んでしまつた。

七月
自転車さ旗立てて、アイスクリン売りが来た。コップも食われるんだと、おらたまげた。

南京袋持つた人が集まつてきた。役場で政府の米分けてくれる日だ。

夏休みの友代二銭納めて、通信箋もらう、明日から夏休み

八月
『水あび場作りにこねえやつは一水あそびさせぬ』って正一にいわれた。道端にシノブ自動車の赤い三角の旗が立つてゐる『誰か町さいくんだべ』

水のませていた。盆署とり、おれめつけておいた柳の木、とらっぢや。背中の皮むけた。

からす瓜で提灯こさえて、お葬式をまつていた。

柿さ爪立ておこらつぢや「爪など立てくわれた。
なくとも、甘いか渋いかわかんべ」
すがりに刺つちえ、まなぐ、めいなく

要三やんの話
芳吉やんが焼酎のんによつぱらつていつから、せでくんべと思つていたら、おれの

儀平やんの話
おでいはんにやの日
ふかし、二どもらいして、おはるばつばにおこらつぢや。

くわれた。

正三は、もつこで、へいぶつてよこす
マンガ読んで歩いでいだら、馬に顔かじらつぢや。

手におこられる。
おんつあんと父ちゃんがしゃべつていた
『秋蚕と味噌汁はあたつたことがねえ』

なつた。
タッペすめりして、川つべりした。
おますやんの話
ゆんべ お寺のもりから、南の方さ人魂（ひとたま）とんだんだぞ、人魂は山鳥の眼が光んだ

嫁さまが わらしおぶつて重箱とおしめ
もつて、裾まぐつて川渡る日 お盆の十六日。

先生が「海見たごとある人、手あげて」といたら、三人ばかり手をあげた。「どこの海さ行つたの」つてきいたら「福島の海さいつた。海はちゃつこがつたが、舟があつたから、間違ひねえ」つていつた。
おらもいつてみでい
又 背中の皮むけた

柿とりにあがつて、柿の木からおちたら下で、親父がみていて「両方の手はなす馬鹿あつかー」

せびすこの魚とりは、寒い

柿さ爪立ておこらつぢや「爪など立て

加藤重芳

顔みで「おめえだんじや」つてゆうから「おれ要三だべえ」とゆつたら「ここどこだ」とさきかえした。おれが「ここは天神様で、今日はお祭りだべした」つておせいたら、「うーん、ほしが」つて考へてから、わかつたんだと思つていたら「ほんじやおれだんじやべ」つていいやがつた。おらかまつていらんにえできつてしまつた。

マントかぶつて つくり声して
ココ ココ ワー白餅だ―

ココ ココ 粉もちかあ

カカ カカ 水かけらつぢや

ココ ココ にさら 向田のやろめら

だな

四方拝の日
みかんがもらえる日。たけおは、ごしん

え(天皇陛下の写真)みたんだと。ごしんえみても、ぜい(いい)もんだべが。

おでいはんにやの日
ふかし、二どもらいして、おはるばつばにおこらつぢや。

生活の伝承

「おまつり見ていな モンひきはいてる
東海道五十三ツギだあ」
「もとは なんだべ」
熊のごろ(穴)は息で雪とけでつから、すぐわかる。
熊のごろ 柴木つつこんでやつと、熊はだんだん出口の方さでてくる。
熊のやろ しりもちついて でかさ、がつていた。熊は秋になつと、松やにてげスメド ふさぐんだと。

熊は、ごろの中では、人にかかるねいもんだ。
雪ふつて、ふっかけできた。明神様までづこし しつべ。道さ水まいて、たつペやつて、おこらつちや

学校帰り 馬つなぎ つねでおく 台風のどき、電気けいた。おつかねー

川ました。四ヶ森ぬけた。流し木拾いさんんべ。すぐだもつてからかつかみさいんべ。

儀平やんに「自転車さぬさつてどこさいぐん」できくと、
ヤハズ山さ 山くぢらとりさいぐ とか
ヤハズ山さ うさぎとりさいぐ とか
ヤハズ山の陰の オテント様、ひろつてきて あつたまつペ とか

ヤハズ山の陰は オテント様 タドンみてに コロコロしてんだぞ つていう。田植えと屋根ふきんときは、屁をたれんな人が死ぐど、青鬼だの赤鬼が、死人の生きでいつときのと調べで責めにくんだぞ。せめつとき木の又責めにすつか、針の山か



火あぶりにすつか 血の池地獄さやつがしらべんだぞ。
鬼たちがお墓に調べにきたとき 又木へまつたき)か立ててあんのみつと、木の又責めは終つたと思うんだぞ 盛飯に箸立てておくど 針の山、線香をたてておくと火あぶりの刑、茶水は血の池の責めがみな終つたと思つて、鬼が帰つていぐんだぞお墓りはかかしてはなんねいぞ。

別記 加藤さんは 昭和十三年九月一日 夏休みが終つた二学期の始業式に 「尋常小学校六年生 加藤重芳 常ニ身体ノ鍛練ヲ考へ健康色衆ニ勝レタリ依テ之ヲ表彰ス」という表彰状を受けている

編集子追記

—昭和六十一年度

民家園事業より—

民家園では、今年度も夏休みの七月三十日小学生を対象に「昔の一日」という体験学習を実施いたしました。

当日の参加者が昔の農家の一日の暮らしを実際に体験した感想を文集として残しましたが、その一部を紹介します。

福島市立蓬萊小学校 三年 小野塚亮平 ぼくは、さいしょにわたなべ家とむかしの家を見たのは、はじめてでした。しごとがあんなにたいへんとは思わなかつた。ぞうきんがけをして、おやつをたべて、木をあつめたりして、やつとおひるごはんになりました。ごどはお話をしてもらつて、おわつたらかやの中でおひるねをしました。おわつたらあそびでドッヂボールをやってぼくはぜんぜんあたりませんでした。

福島市立鎌田小学校 四年 益山 正広 きょうはぼくは、むかしの一日というところにさんかしました。わたなべ家でごはんをたべたりあそんだりしました。じいちゃんがおもしろいものをもつてきて二人だけといつてぼくはいつた。むかしは、たいへんたいへんでたまらなかつたと思う。あとそうち、あんなにまじめにやつたのは、はじめでだ。あとあんちゃんとあそんだりました。いろいろの人とともにだちになりよかつた。あとみんなえんの人は、家をまだだいじにしてほしい。じいちゃんには、もつともつとあそびをおしえてほしい。どちらさんは、とてもやさしかつた。きのことりとりもたのしくいっぽいとれた。あごはんは、とてもおいしいかった。むかしのものがちゃんとしてあってすてきです。またらいねんもきたいと思います。

福島市蓬萊小学校 六年 渡辺 孝光 ぼくは、友達のお母さんのすすめでここに來た。最初はどんなことするのかと思つてきたが、プログラムを見て、「おもろしきうだな。いもめし食べたいな。」と感じた。

ぼくが一番やりたかったのは、コイのえさやりだつた。だからえさやりの時はむちゅうになつてやつた。やはりおもしろくて二回ぐらいえさをもらつた。

広い渡辺家でみんなと話したりごはんを食べたりしたことがたのしかつた。それによく勉強にもなつた。

福島市立平野小学校 五年 織田 隆昭 最初ぼくは、この話をお母さんに、ききました。おかあさんがかつてにきめたから

うだつたからきてみました。

最初は一人でいくつもりだつたけど友だちをさそいました。

やつぱりきてよかつたと思いました。そ

れは、ぞうきんかけは、ただふけばいいと思つていたけど、ぞうきんのしづらかた、板のみぞにあわせてふくぞうきんがけ、初めてわかりました。

それから石うすやこうせん、草むしりそれからかや。

はじめたたべたこくせんは、ちょっとむせるけどあまくておいしい。草むしりは、家でやるといいややつているけど、むちゅうでやりました。そのたいろいろはじめでの体験だつたからとてもおもしろかったです。

ぼくが一番やりたかったのは、コイのえさやりだつた。だからえさやりの時はむちゅうになつてやつた。やはりおもしろくて二回ぐらいえさをもらつた。

広い渡辺家でみんなと話したりごはんを食べたりしたことがたのしかつた。それによく勉強にもなつた。

福島市立平野小学校 五年 織田 隆昭 最初ぼくは、この話をお母さんに、ききました。おかあさんがかつてにきめたから

うだつたからきてみました。

最初は一人でいくつもりだつたけど友だちをさそいました。

やつぱりきてよかつたと思いました。そ

れは、ぞうきんかけは、ただふけばいいと思つていたけど、ぞうきんのしづらかた、板のみぞにあわせてふくぞうきんがけ、初めてわかりました。

それから石うすやこうせん、草むしりそれからかや。

いろり

民家園の各民家・展示館に置いてあるノート、ここには、入館者のみなさんの民家園で感じたこと、覚えたこと、要望などが自由に書いてあります。そのいくつかを紹介します。(全て昭和59.60年度)

ランプを初めてみました。

前からみたかったので本当に来てよかったです。いつでもこわしたりしないように大事にとっておいてください。

小学五年 ようこ
屋根から水がもってこないかなあと思った。

二月二十一日 友美子

旧阿部家の住宅の屋根のカヤが他の物と比較して一番よくできていると感じた。他のカヤは、スキ間がありカヤ自体が厚さがない。

(六月一日)

夏も涼しく住んでみたいと思いません。心が落ちつきものが考えられそうです。土間はとても人間らしい心にしてくれます。ここで暮らした人達は何をしゃべっていたのでだろか。内からすると外の風景がわくの中に、テレビの画面より美しい。(仙台荘)

旧阿部家自由ノートより

土間がある家つていですね。それに囲炉裏は家庭的であつたかい感じです。少しきれいすぎです。もつとすすぐているほうが感じができると思ひます。

幼き日遊びし生家を思い出しました。手伝いの板の間のぞうきんかけのつらさも

「力を入れないと光らないぞ!」と父の大

きな声がきこえます。戸棚の前の品々も昔の日々と同じです。(市内 四十一女性)

わら入りのふとんに寝ていてノミがわからないのかなあと思った。涼しくて良い所だ

わら入りのふとんに寝ていてノミがわか

ないのかなあと思った。涼しくて良い所だ

わら入りのふとんに寝ていてノミがわか

ないのかなあと思った。涼しくて良い所だ

旧渡辺家自由ノートより

家と物置きがくつついでいる。だから広いんだ。

旧菅野家自由ノートより

昔話がおもしろかった。昔の道具の名前がわからないし、どういうふうに使うかもわからなかつたから説明する人がいる時に又来たいと思う。

美香

加藤

今日、私は家族五人で来ました。久し振りで

す。私の家も農家ですので、父母から昔の農家の話など聞き久し振りに家族の交流が図れた気がします。それにしても昔は大きなかつたのです。暖房などどうしていたのでしょう。それに明りとりも広い園内にこれだけ多くの民家を保存している方々のご苦労がうかがえます。とてもすてきな旅行となりました。

(十一月二十四日 茨城より)
(八月四日 富田陽子)

今とちがつて昔のふとんは中がワラになつていていたくないのかと思った。まくらがずいぶん高くなつていていたのでびっくりしました。(六月三十一日)

アルゼンチンよりお客様を迎えて民家園

を案内しています。生活の原点に触れる感覚性を見失っているような反省しきりです。

(八月七日 伊達郡保原町)

旧奈良輪家自由ノートより

立派に復元され細かいところまで良く気がついて保存されています。年寄りは昔のことを思い出され、子どもには良い勉強になると思います。手入れが行き届き感謝しました。

はたおり機が今までとは少しちがうのでいくつかの種類があるので気づいた。
(三月三十一日)

いくつもの種類があるのに気づいた。
(三月三十一日)

各民家に展示されている古い農具等に名前と使い方など付いているともっとわかりやすいと思います。

じということで、決してふんではないと言わせてきましたが、見学者の中に平気で敷居をふんでいる人も見かけました。

とつても楽しかった。また来て今度はかわったものを見たいなあ。こんな昔をじょうずにもつてきたなんてすごいなあ。こんなすてきな所をみんな「みたいなあ」と思

うのでしようね。

小学三年 よしえ

昔の家の様子が手にとるようになり勉強になりました。一つ一つの道具に名称や使い方が書いてあつたらと思います。小学生に社会を本で教えるよりもここへ連れて来てあげたいと思いました。

(七月二十三日 元教師より)

べこそうりを先生に手伝ってもらつて作りました。楽しかったです。

(八月四日 富田陽子)

家族で心落ちついたひとときを持つことができました。子どもたちが昔の生活の中から何かをくみとつてくれればと思います。

(二月九日 伊達町 本田)

(水保小学校 五年)

広くてのびのびとだれに気がねすることなく子どもたちが遊べてとてもよいところですね。昔話もおもしろく楽しめました。

(三月二十七日)

きょうはとつても良い天気です。民話の企画はとてもいいですね。これからもいろいろな企画で、もっともっと見物客が入りますように。

(三月二十四日)

家の入口の敷居はその家の主人の頭と同

展示館自由ノートより

